

市内の小・中学校では、子どもたちが心身ともに健康で人間性豊かに育つよう、工夫を凝らした取り組みを進めています。今号では、「その子のよさに出番を」をスローガンに児童一人ひとりが主体的に活動している市立第一小学校と、今年度と令和2年度の2か年間、不登校の取り組みを実践する研究指定校の市立下里中学校の取り組みを紹介します。詳しくは指導室☎470・7781へ。

市立学校の取り組みを紹介!



認められ、感謝される喜びは子どもも教員も同じです

令和元年12月25日は2学期の終業式。「皆さんを一生懸命支えてくださった先生方に感謝の気持ちを伝えて、お話を終わります」。校長は毎学期末に必ず、こうして子どもたちの前で私たち教員に感謝の言葉を伝えてくれます。この言葉を聞いたときに私は心が温かくなり、前向きになれる。認められたり感謝されたりすることが意欲につながるの、大人も子どもも同じでしょう。子どもたちは毎日新しいことを学び、多くのことに挑戦し続けています。だからこそ、「6年生なのだから当然」、そういった躰(しつけ)的な指導が必要な一方、「頑張ったね」「また頑張ろうね」といった、次への意欲につながる、認めて励ます指導も大切にしたいと考えています。

第一小学校では、教育目標の「心温かく 光輝け 稲穂のように」を具現化するために、「その子のよさにでばんを」をスローガンにして、児童一人ひとりが輝ける学校を目指した教育活動を行っています。一人ひとりが輝くために、「3つのC」と「4つのチャレンジするために大切なこと」を全校児童に呼びかけています(写真1)。子どもたちが生き生きと輝いている一例を紹介します。写真2は、「挨拶プロジェクト」と題して、代表委員会の子どもたちが、体育館の入口で全校児童を挨拶とハイタッチで出迎えている様子です。このプロジェクトが始まったのは昨年の10月。当初は玄関での挨拶から始まりましたが、なかなか挨拶を返してくれず、「校舎の中を歩き回って挨拶してみよう」「手を振りながら挨拶したらどうかな」などとアイデアを出し合いながら試行錯誤し、今の形になりました。子どもたち全員が、次々に笑顔でハイタッチと挨拶をしながら体育館に集まってくる様子を見てみると、その明るい雰囲気、一日が前向きに始まる心地よさを感じます。



こうして子どもが生き生きと活躍するために、必要なのが冒頭にも書いた、「頑張りを認めて励ますこと」です。チャンス(役割やきっかけ)を与えるだけでなく、それを達成するために頑張る子どものよさを認め、励まし続けることが子どもの心を育てます。頑張ることのよさを味わうと、大人では考えつかないような、豊かな発想で動き出すのです。明るい学校の雰囲気は、こうした子どもの生き生きとした姿がつくるのです。一人ひとりのよさに出番があり、一人ひとりが輝ける学校をこれからも目指していきます。職員室では1週間に一度、「夕会」の時間を活用して、子どもたちのよさや頑張りを話題にする「ハッピーアワー」という取り組みを行っています。「今日、こんな頑張りが見られて成長を感じました!」「3組のAさんが雑巾を真っ黒にして掃除していましたよ!」、こういった言葉が飛び交っています。子どもたちの活躍する姿を語り合い、共感し合う職員室の雰囲気を想像していただけるのではないのでしょうか。今後も第一小学校の土曜公開授業や行事の際にぜひ市民の皆様に来校していただき、子どもたちの頑張りに励ましの言葉を贈っていただけたらと思います。(市立第一小学校主任教諭 丹野 裕基)

全ての生徒の居場所作りをめざして

この数年来、下里中における不登校生徒数は極端な増加はないものの、毎年一定数の生徒に不登校、あるいは登校渋りという状況が見られます。本校では不登校を減らすため、あるいは未然に防ぐために学校としてできる対応は何か、学校だからこそできることは何かという視点に立ち、「すべての生徒の居場所作り」を目指して取り組みを進めています。例えば全校生徒の的確な実態把握を行うための『hyperQUテスト(7月と11月に実施)』(一人ひとりの生徒が置かれている状況やクラス全体の様子を見取り、担任が声かけや取り組みを検討するもの)があります。今号ではそのほかの取り組みの中から二つ紹介します。



【ボランティア活動の推進】誰かの役に立った実感や感謝される経験を積ませることで「自己有用感」を育てることを目指しています。例としては、①生徒会が主催する「朝の地域清掃(通称朝ボラ。月に1回実施。毎回70人前後が参加)」(写真3)、「西団地祭りごみの分別ボランティア(7月の西団地祭りでの活動。今年度3回目約60人が参加)」。②部活動と地域の連携による活動として、「吹奏楽部による高齢者施設への慰問演奏、西団地祭りでの演奏」「青少協主催『みんなで楽しく地域まつり』への部活動ごとの参加。今年度は6部活75人が参加」などがあります。ボランティア活動に参加したきっかけを聞くと「友達に誘われたから」がほとんどでしたが、2回目以降は「やってみたら面白かった」「何だか気分が良かった」という声が多くなり、そういった生徒間の口コミによってボランティア活動が浸透してきているようです。



【別室登校】全く登校できないのではなく、登校はできるが教室に入るのが難しいという生徒も数人います。その生徒を対象として、教室棟と離れた棟の校舎1階にある応接室を別室登校のための部屋として活用し、学力向上パワーアップサポーターや特別支援コーディネーターが中心となって部屋の運営を行っています(写真4)。自学自習をベースに学習に取り組むため、担任や教科担当者との連携により自習課題や、別室でもできる教科の課題(美術や家庭科の作業等)を組み込んだ時間割を作成し、活動しています。生徒一人ひとりの登校・下校時刻の管理、活動内容等を個別の記録にまとめ、担任との連絡にも活用しています。出られる教科の授業にはクラスの友達が誘いに来て、一緒に授業に出ることもあります。学習に気持ちが向かない時には、その生徒の得意なこと(イラスト、ペーパークラフト等)に取り組み、出来上がった作品は校内に掲示したり、各種便りのイラストに活用したりしています。「別室登校」は人的及び学校の施設設備上等さまざまな課題もあり検討中ですが、この別室登校で居場所が確保されている生徒がいることも事実です。

下里中では、今後も専門家や外部機関との連携を深めながら、これらの取り組みを中心に、一人ひとりの生徒に寄り添い、その居場所作りを目指して取り組んでいきたいと考えています。(市立下里中学校長 山浦 桂子)

シリーズ 教員の働き方改革

近年、「教員から全校に導入した出退管理システムについては、在校時間の把握ができるということ」「継続に問題はない」という意見が90%ある一方、出勤簿としての取扱いに課題があること等の理由で「再検討を要する」という意見が10%ありました。「音声自動応答装置」(「継続に問題ない」という意見が100%でした。「保護者からの電話も時間内に入るようになり良い傾向である」「学校から家庭への電話連絡も時間内に行うようにしている」という意見がある一方、「問題は起きていないが、学校間のやり取りができないことに不安がある」「風水害発生時の電話対応については協議する必要がある」との指摘があります。「働き方改革」は施策を検証していくことで、効果のある施策を複合的に進めていくことで、より着実な成果に結び付くと考えています。教員より適切な働き方が実現できるように、今後も保護者や地域の皆様のご理解とご協力をお願いします。詳しくは指導室☎470・7781へ。



東久留米市 総合教育会議を開催しました

「総合教育会議」は、市長と教育委員会が地域の教育課題等について意見交換や協議を行います。令和元年7月1日(月)、市役所において1回目の会議が開催されました。初めてテレビ撮影が入りましたが、市長、教育委員をはじめ事務局職員も、オリンピック・パラリンピック機運醸成の願いのこもったお揃いのポロシャツ着用で、市長曰く「チーム教育委員会」という感じですね!というラックスした雰囲気の中、「私の中に最高のレガシーを残そう!2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に」をテーマに、活発に意見交換を行いました(写真5の右から馬場委員、宮下委員、並木市長、尾関委員、細田委員)。話題の多くは「オリンピック・パラリンピックが開催される2020年は市制施行50周年にも当たるので、併せた形でレガシーとなる事業を実施できないか」に集まりました。教育委員からは、「オリンピック・パラリンピックの開催はそれ自体が目的ではなく、通過点である。今後、どう生かされていくかが大事である」と、多くの意見が出されました。



市長からは、「2020年は多くの市民の方が個々にレガシーを残されるだろうが、縁があってこの東久留米という地で一緒に時を過ごすのだから、東久留米レガシーを共有できる事業を実施するなどし、絆を深めていきたい」との意見がありました。2回目は、11月7日に、令和2年度予算編成に向けて、市長に教育委員が意見を伝えました。詳しくは教育総務課庶務係☎470・7775へ。